

エジプト

山内富美子

エジプトは世界遺産の宝庫である。その宝庫を訪れた順に、感動のエジプト・ロマンの旅で辿ってみたい。

首都のカイロ市内では考古学博物館を訪問。ツタンカーメン王の関係の秘宝は、すごい。彼の黄金のマスクをはじめ、すばらしい装飾を施した黄金のお棺や、彼と若い王妃との微笑ましく、親密そうな玉座、死者を守る女神たちや、死者を守護する山犬の姿のアヌビス神等々。そして、紀元前2650年ころからの歴代の王や王妃、王女達の数々の像の巨大さと精巧さには驚嘆する。



考古学博物館

さて、考古学博物館の外に出ると、3月に訪れたのであるが、今年初めての雨が降り、砂あらしで街の中が黄色く曇っていたのがとても印象的である。カイロ近郊のギザでは三大ピラミッドといわれているメンカウラー王とカフラー王とクフ王のピラミッドを見るが、一番大きいのはクフ王の大ピラミッドである。クフ王のお棺を納めたといわれる玄室には、花崗岩のお棺が置いてあるが、最近の学説ではクフ王のお棺ではないと異説を唱える学者もいるとのこと。クフ王のピラミッドの中に入った当日は少し雨が降り、時期が3月で暑くない日であったが、大回廊の急傾斜の階段を登ってクフ王の石棺の所にたどり着いたときには、汗がぽたぽたと落ちるくらい蒸し暑さを感じた。



クフ王の大ピラミッド

現地のガイドさんの話では、「真夏には、とてもここまでは、上がって来られない」とのこと。又、大回廊の下の方にあるトンネルのような通路をくぐって、女王の間にも行ってみる。ギザで出会ったスフィンクスは顔がカフラー王だとされていて、体がライオンであるが、鼻がこわれていて、おせじにもハンサムとはいえず、少しがっかりしたのを思い出す。鼻はアラブ軍が砲撃練習で落としたり、フランス軍が小銃で打ち落としたりと、色々説があるが、崩壊の危機にさらされているのは確かだ

ある。又、王の象徴であるつけひげは、イギリスに持って行かれ、現在、大英博物館に所蔵されている。

さて、次は、カイロからバスで 3 時間、鳩の家と呼ばれるような珍しい建物を見ながら、砂漠ハイウェイを走って到着したのがアレキサンドリアである。紀元前 4 世紀に、アレキサンダー大王が造らせた都市で、クレオパトラも住んでいたという町である。

地中海に面していて、最近では海底遺跡の発掘も行われているが、地上にある遺跡を見学する。小高い丘の上に立っている 30m の巨大なポンペイ



鳩の家



グレコ・ローマン博物館

の柱、地下墳墓のあるカタコンベ、お城のようなカイト・ベイの城塞、4000 点の遺物の展示してあるグレコ・ローマン博物館などを見る。

グレコ・ローマン博物館には、アレキサンダー大王や、クレオパトラ、シーザーの像があり、アレキサンドリアを始め、エジプトの各地から出土したギリシャ・ローマ時代の遺物が展示されていて、あたかも、ギリシャの博物館の中にあるような印象を持った。

次に、カイロ空港からナイル川の上空を飛ぶこと南へ約 1 時間、古都ルクソールに到着。ルクソールは、かつては、テーベと呼ばれ、エジプト最大の都市として栄えた街で、ナイル川の中流に位置する。ナイル川を挟んで東岸には、カルナック神殿群とルクソール神殿がある。カルナック神殿ではアメン大神殿を中心に、羊頭のスフィンクス



カルナック神殿群



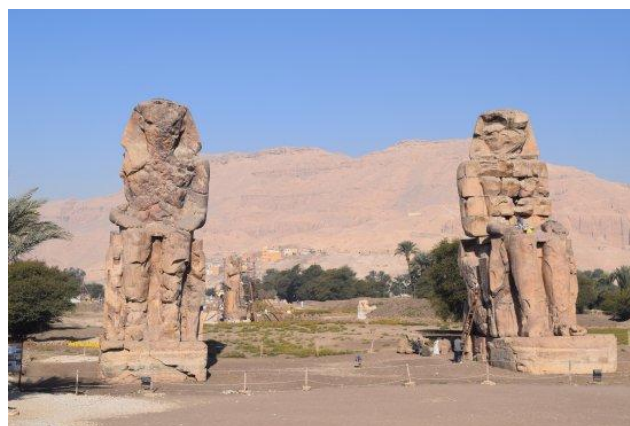
ルクソール神殿

を中心に、羊頭のスフィンクス

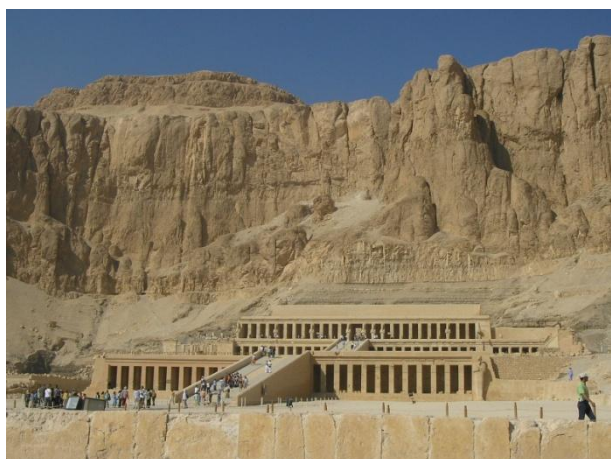
40 体が並ぶ参道、大列柱室、ラムセス 2 世の巨像、王や女王のオベリスク、スカラベ（ふんころがし）の大石像など、驚くべき巨石の文化に出会う。ルクソール神殿の前には、人頭のスフィンクスの参道があり、ラムセス 2 世の坐像や、オベリスク（記念碑）や、沢山の列柱が立ち並ぶ。ここで、ひとつ印象に

残っていることは、このルクソール神殿の中に、イスラム寺院（モスク）が建っていて、遠い過去と現在が共存していることである。

ナイル川を船で渡り西岸に着くと、そこには、王家の谷を見守るように、ナイル川に向かって立っている一対のメムノンの巨像がある。高さ 21m の巨像の足元には、母と妻の小さな像が彫ってある。又、西岸には古代エジプトでは珍しい女性のファラオであるハトシェプスト女王の華麗な葬祭殿がのこっている。ここでは東京から来たツアーの何人かが、テロリストによって射殺された悲劇のあった場所でもある。



メムノンの巨像



ハトシェプスト女王葬祭殿

に入り、いずれもその大きさとゴージャスさに息をのむ思いがする。ツタンカーメン王の墓は、内部の副葬品のほとんどをカイロの考古学博物館で見っていたのと、入場するのに大勢の人が並んでいて時間がかかるので入らず、後で入った人に聞くと「墓は小さいし、内部も大したことは無かった。」とのことだった。

さて、西岸のハイライトは王家の谷で、今までに 60 余りの墳墓が発見されている。しかし、遺跡の状態により公開している墳墓も流動的で、有名な墓でも閉鎖中の場合がある。

王の墓所は谷間の奥に隠された岩窟墳墓で、中には入り口から玄室まで 150m もある大きな墓もある。通路や各部屋の壁や天井には、美しく彩色された神々や王の像や、星座及び、ヒエログリフ(古代エジプトの象形文字)の絵図が描かれていてとても豪華である。私はラムセス 3 世と 9 世、そして、トトメス 3 世の 3 つの王墓



ヒエログリフの絵図



アブ・シンベルの神殿

エジプトの世界遺産の中で、最も印象に残っているのが、今から約 3300 年前に造られた古代遺跡の巨大な建造物であるアブ・シンベルの神殿である。そこには、オプションで出かけ、空路ルクソールから、アスワンを經由して、アブ・シンベルに到着。アブ・シンベルは、エジプトの南端に位置していて、スーダンとの国境に近い。こんな辺境の地に、紀元前 1300 年もの昔に、巨大な神殿が造られたことに、驚きを禁じ得ない。しかも、ダム建設により神殿が、

ナセル湖の湖底に水没するのを救済するためにユネスコが動き、大規模な解体移築作業により、神殿遺跡が世界遺産として、私達の目の前に姿を現していることに対して、畏敬の念さえ覚える。壮大な移転事業の様子をビデオで見たが、国際協力の下、人類の英知を集めて、現代の科学の力で岩山の中に大ドームを造り、その中に神殿は納められている。幸いに、その時訪れた者が数名の少人数であったため、現地のガイドさんに案内されてそのドームの中に入り、コンクリートで支えられている工場のような神殿の裏側を見ることができた。

アブ・シンベル大神殿の正面には、高さ 20m もある巨大なラムセス 2 世の像 4 体が座り、足元には王妃や王子・王女がいて、縁取りの最上部には両手を挙げて朝日を礼拝する 22 体のヒヒ像が並んでいる。神殿の中に入ると、高さ 10m のラムセス 2 世の立像 8 体で構成されている大列柱室があり、その両側の壁にはヒッタイトとの戦いを描いたレリーフがある。神殿の一番奥にある至聖所には、神格化したラムセス 2 世を含む 4 体の神の座像が鎮座している。毎年、2 回、春分の日と秋分の日頃には入り口から差し込んだ日の光りが、これらの神像を照らすという。この日に意図的に合わせて設計が行われたかどうかは、学者間で議論の分かれているところであるが、年に 2 回だけ、朝日が神殿の入り口から真っ直ぐに差し込み、至聖所奥の 4 体の神像を照らすという事実には、やはり、計算された英知があると思われる。この話を聞いたとき、実際に日の光りが神像に当たる光景を見ることの出来る日に居合わせたら、どんなにすばらしい事かとふと想像してみた。アブ・シンベルにはラムセス 2 世がネフェルタリ王妃のために建造したハトホル神殿（小神殿）もあり、これら大神殿と小神殿の前には、満々と水をたたえた静かなナセル湖が広がっていて、岸辺の水としばし戯れ、旅情にひたることのできた。



ハトホル神殿

了